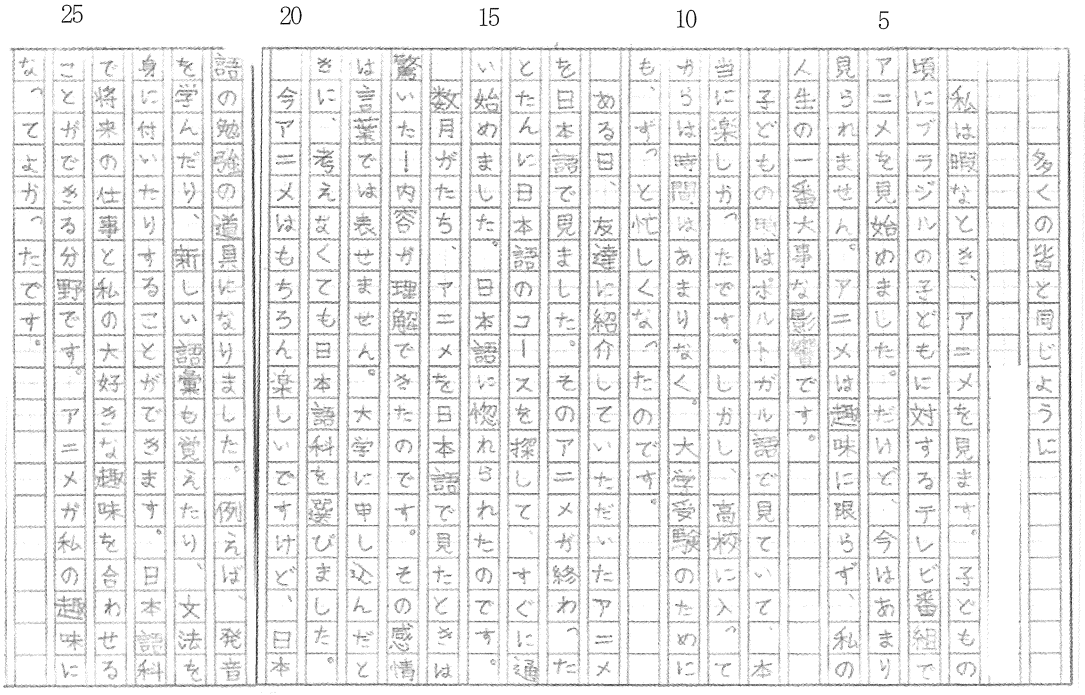
ブラジル・ポルトガル語話者の日本語作文の分析

馬場　良二



多くの皆と同じように

私は暇なとき、アニメを見ます。子どもの頃にブラジルの子どもに対するテレビ番組でアニメを見始めました。だいぐ、今はあまり見られません。アニメは趣味に限らず、私の人生の一番大事な影響です。

子どもの頃はポルトガル語で見ていて、本当に楽しかったです。しかし、高校に入ってからは時間はあまりなく、大学受験のために、ずっと忙しくなったのです。

ある日、友達に紹介していただいたアニメを日本語で見ました。そのアニメが終わったとたんに日本語のコースを探して、すぐに通い始めました。日本語に惚れられたのです。

数月がたち、アニメを日本語で見たときは驚いた！内容が理解できたのです。その感情は言葉では表せません。大学に申し込んだときに、考えなくても日本語科を選びました。

今アニメはもちろん楽しいですけど、日本語の勉強の道具になりました。例えば、発音を学んだり、新しい語彙も覚えたり、文法をこどもができる分野です。アニメが私の趣味に身に付いたりすることができます。日本語科で将来の仕事と私の大好きな趣味を合わせるなってよかったです。

作文１　多くの皆と同じように

0. はじめに

私は、日本語教師で、この作文「多くの皆と同じように」は、ブラジルの大学の先生からいただきました。ブラジルの言語は、ポルトガル語です。

学習者の作文を添削するときは、学習者の意図をはかり、この意味だったらこう、これが言いたいのだったらこう、と想像力をはたらかせます。私だったらこう言うというだけで、添削、訂正してはいけません。なんでこう書いたのか、日本語学の知識を駆使して分析し、学習者の能力、性格まで配慮する必要があります。

私の特技は、ポルトガル語です。ここでは、日本語－ポルトガル語の対照言語学的な観点も取り入れて分析し、どのような指導をしたらいいか考えてみました。

1. 作文 1「多くの皆と同じように」について

1960 年にブラジリアへ移転するまで、リオ・デ・ジャネイロ市が、1809 年からブラジル連邦共和国の首都でした。そのリオ・デ・ジャネイロ市に設置された国立大学がリオ・デ・ジャネイロ連邦大学です。

作文の打ち直し

多くの皆と同じように

私は暇なとき、アニメを見ます。子どもの頃にブラジルの子どもに対するテレビ番組で
子ども向けのテレビ番組
5行目 アニメを見始めました。だけど、今はあまり
けれども
見られません。アニメは趣味に限らず、私の人生の一番大事な影響です。
というだけでなく
私の人生で一番大事なものです

子どもの頃はポルトガル語で見ていて、本当に楽しかったです。しかし、高校に入ってからは時間はあまりなく。大学受験のためにも、ずっと忙しくなったのです。
10行目
が

ある日、友達に紹介していただいたアニメを日本語で見ました。そのアニメが終わったとたんに日本語のコースを探して、すぐに通い始めました。日本語に惚れられたのです。
「もらった」？
「観る」？
そのアニメを見おわってすぐに
15行目

数月がたち、アニメを日本語で見たときは驚いた！内容が理解できたのです。その感情は言葉では表せません。大学に申し込んだときに、考えなくても日本語科を選びました。
数か月
「観る」？
申し込む
迷わず、なやむことなく
20行目 今、アニメはもちろん楽しいですけど、日本語の勉強の道具になりました。例えば、発音を学んだり、新しい語彙も覚えたり、文法を
が
を

身に付いたりすることができます。日本語科
付け　　日本語科は
で将来の仕事と私の大好きな趣味を合わせる
将来の仕事に大好きな趣味を役立てることができる学科です。
25行目　ことができる分野です。アニメが私の趣味に
で
なってよかったです。

訂正すべきと判断した箇所は＿＿＿、学習者次第は＿＿＿、訂正の必要はないが気のついたことをのべた箇所に＿＿＿を引きました。二重下線の下の記載事項は、訂正候補です。

1920年に、リオ・デ・ジャネイロ州内にあったいくつかの教育機関が統合されて、リオ・デ・ジャネイロ大学が成立し、1937年にブラジル大学と改称、そして、1965年に現在の名称となりました。

リオ・デ・ジャネイロ連邦大学での日本語の最初の授業は、1979年に文学部で開かれ、翌年の1980年、日本語科が設置されました。サン・パウロ大学をのぞくと、ブラジルで最も歴史のある日本語科だと言えます。

そのリオ・デ・ジャネイロ連邦大学文学部日本語科の学生が書いた作文が、「多くの皆と同じように」です。書いたのは、2年生の男子学生で、執筆当時、すでにN3[i]を取得していました。作文は、2017年10月の授業の課題で、課題を与えられてから1週間で提出されました。ブラジルの学年は3月に始まるから、入学して1年半で書いた文章だということになります。

作文によると、高校のときから日本語の勉強を始めたようです。それにしても、日本語を専門的に勉強するようになって1年半でこれだけの文章が書けるというのは、すばらしい。ことに、非漢字圏の学習者でありながら、漢字を使いこなしています。それに、平仮名、カタカナもふくめて、字形がととのっていて、きれいです。

子どものころに夢中になったアニメを、受験でいそがしくなった高校のころ、日本語で見て、胸をふるわせた感動が、そして、日本語を専門にできた誇らしさ、アニメがその日本語学習の道具になってしまったことに対する感情、それらが生き生きとつたわってきます。

授業では、門脇（2014）が使われました。

2. 教材について

門脇（2014）は、『みんなの日本語 初級Ⅰ・Ⅱ 第2版』に準拠したワークブックで、初

級の早い段階からまとまりのある文章が書けるようになることを目指した教材です。日常的なテーマを20設定し、それぞれに「フロー・チャート」、「モデル文」、「作文のポイント」、「みんなで話しましょう」、「作文メモ」を用意していて、「フロー・チャート」では、テーマに合わせた大まかな構成、「作文のポイント」では文型を提示しています。

上掲の作文は、門脇（2014）のユニット10「趣味」にのっとったもので、「フロー・チャート」は、以下のとおりです。

フローチャート

① （わたしの趣味／好きなこと）

⇩

② （趣味に関係するある日のできごとについて）

⇩

③ （趣味についての全体的なコメント）

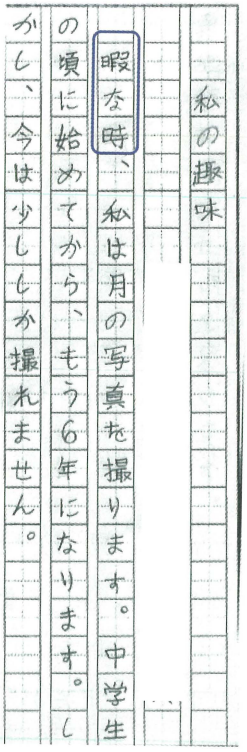
「作文のポイント」には「コンサートのチケットは高いですから、わたしはあまり行きませんが、中村さんはよく行っています」、「わたしは夏休みに友達と旅行に行ったり、アルバイトをしたりしましたが、日本語は全然勉強しませんでした」など、初級の文型を組み合わせて論理を展開する方法が示されています。「みんなで話しましょう」は、学習者の好きなことは何で、いつ始め、今はどのくらいするかを話すよう、「作文メモ」はそれらを文字化するように設けられています。

3.3 行目「暇なとき」について

いただいた作文は、全部で7編、次頁にあるように、そのうちの5編に「ひまなとき」があらわれています。どうしてか、理由は、二つ考えられます。一つは、母語の影響、もう一つは、門脇（2014）にある「モデル文」がそうだから。

そのモデル文は、次ゝ頁のとおりで、よくできています。わかりやすいし、構成がしっかりしている。また、「ーから、ーが、ー」の文型も使われています。学習者にとっては、よい道しるべとなるでしょう。

一方、「趣味」を日本語ーポルトガル語辞書（Coelho 1998）で引くと、「o passatempo, a paixão favorita, a distração[ii]」とあります。名詞「passatempo」を分析的に見ると「passar



私の趣味

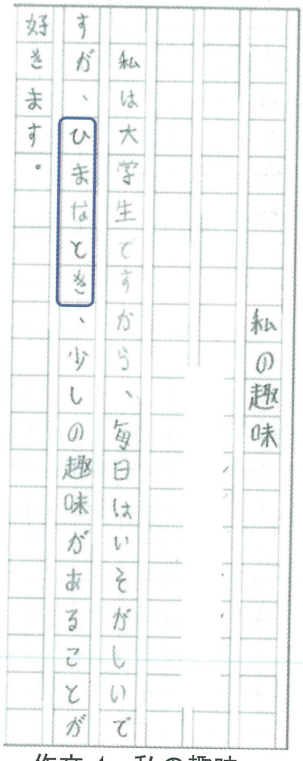
暇な時、私は月の写真を撮ります。中学生の頃に始めてから、もう6年になります。しかし、今は少ししか撮れません。

作文２　私の趣味

私のしゅみ

ひまな時、私は絵を書きます。子どもの時始めたんだ。材料は高いですから、私はあきらめがったが、おばさんは私に買いました。

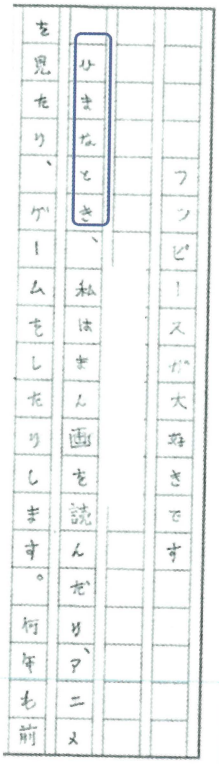
作文３　私のしゅみ



私の趣味

私は大学生ですから、毎日はいそがしいですが、ひまなとき、少しの趣味があることが好きます。

作文４　私の趣味



ワンピースが大好きです

ひまなとき、私はまん画を読んだり、アニメを見たり、ゲームをしたりします。何年も前

作文５　ワンピースが大好きです

tempo」となり、「時をすごす」という意味で、「paixão favorita」は「お気に入りの道楽」、「distração」は「娯楽、気晴らし」です。「passatempo」には、暇なときにやること、というニュアンスがあるのかもしれません。

モデル文

① 暇なとき、わたしはよくギター*を弾きます。大学生*のときに始めてから、もう2年になります。でも、まだ少ししか弾けません。

② この間*、会社の中村さんとギターのコンサートに行きました。コンサートのチケットは高いですから、わたしはあまり行きませんが、中村さんはよく行っています。
コンサートは夜7時に始まりました。とてもたくさんの人*でした。演奏*が始まると*、みんな静かになりました。いろいろな曲*の中には、知らない曲もありましたが、中村さんが説明してくれました。
弾いていた人はあまり有名な人ではありませんでしたが、ギターのきれいな音にとても感動しました*。

③ ギターは、練習すればするほど*おもしろくなります。これからもっと練習して、わたしもいつかコンサートで弾きたいと思います。

「モデル文」における「暇なとき」はツボにはまっていて、典型的な使い方と言えます。ただ、日本語での「趣味」が「暇なとき」にするものだと受け取られては困ります。暇か忙しいかに関わらず、実利を考えずに好きですることなのだということは、押さえておくべきです。

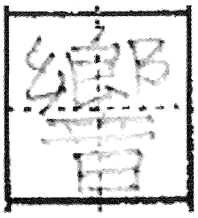
4. 漢字の字形と句読点について

教師によりますが、私は、形にこだわりません。学習目的次第ですが、文字は読めればいいと考えています。日本人だって、私をふくめて、相当ひどい字を書いています。でも、この学習者は力があるので、細かいところまで指摘することは無駄ではないでしょう。

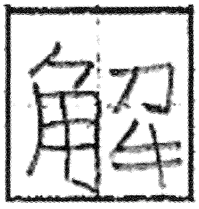
気がついた漢字は、三つだけ、7行目の「響」、17行目「解」、24行目「将」です。

「響」は「郷」の中央に点がよけいで、「解」は「角」の縦棒が突き抜けてしまっています。「将」は、旁が旧字体の「將」に引っ張られてしまったのでしょうか。「漢字3」の字形の漢字は、存在しないようです。

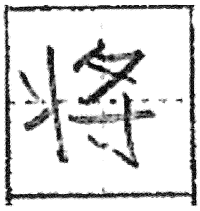
それから、10行目「あまりなく。」の句点は、読点「、」であるべきで、これは、訂正せ



漢字１ ７行目「響」



漢字２ 17 行目「解」



漢字３ 24 行目「将」

ざるを得ません。

5. 9-10 行目「高校に入ってからは時間はあまりなく」

二つ目の「は」は、「が」とすべきだと思いませんか？

日本語学習者にとって、「は」と「が」の使い分けは、むずかしいものです。16-17 世紀に日本で活躍したイエズス会士、ジョアン・ロドリゲスは、その著『Arte da Lingoa de Iapam』で、日本語の語法や言い方を懇切丁寧に解説しています。そして、「は」の使い方については「実例によって教へられるであらう」（土井、1955）と述べています。いくつかの規則をあげてはいるのですが、それだけで十分だとは思わなかったし、記述だけでは言いつくせないと判断したのでしょう。

ここでは、助詞の「は」、そして、「が」の意味、用法を見ていきます。

野田（1996）は、第 2 章の 7「「は」の基本的な性質のまとめ」p. 8 で以下の五つをあげています。

1) **「は」の文法的な性質**――格を表す「が」や「を」などとは違い、文の主題を表す助詞である。
2) **「は」が使われる文**――「～が」や「～を」のような格成分の名詞が主題になった文のほか、連体修飾の「～の」の中の名詞が主題になった文、被修飾名詞が主題になった文など、いろいろなものがある。
3) **文章・談話の中の「は」**――「は」が使われる文は、前の文脈にでてきたものや、それに関係のあるものを主題にする。そして、文章・談話の中では、話題を継続するのに使われる。
4) **従属節の中の「は」**――主題の「～は」は、「～たら」、「～とき」、「～ため」のような従属節の中にはでてこない。
5) **「は」の対比的な意味**－主題を表す働きが弱く、対比的な意味を表す働きが強いものがある。

一般的に、このうちの1)「主題を表す」(ニューヨークは、今、9時です)、5)「対比を表す」(朝は涼しいですが、日中は暑いです)は、初級で教え、2)「「は」文の構造のバリエーション」、3)「「は」は前に出てきたもの」、4)「「は」の文法的な性質」は中級になってから取り上げます。

作文中に「は」は、十あらわれます。

は−1　3行目　私は
は−2　5行目　今は
は−3　6行目　アニメは
は−4　8行目　子どもの時は
は−5　10行目　高校に入ってからは
は−6　10行目　時間は
は−7　16行目　見たときは
は−8　18行目　その感情は
は−9　18行目　言葉では
は−10　20行目　アニメは

野田の1)「主題を表す」は、1から10のどの「は」にもあてはまりそうです。5)「対比」は、は−2「今⇔子どもの頃」、4と5「子どもの時⇔高校に入ってから」、9「言葉⇔言葉以外の何か」、そして、3)「「は」は前に出てきたもの」は、1「私」(作文なので、作者は文脈上、既出と考えていいでしょう)、3と10「アニメ」、4「子どもの時」、8「その感情」に言えるでしょう。

ただ、これらの判断は日本語話者だからできるのであって、学習者に容易ではありません。ロドリゲスたちもなやんだことでしょう。

は−6「時間はあまりない」が主題の「は」なら、何で「が」にかえなくてはいけないのでしょうか。

鈴木忍(1978)は、「一つの文に「は」が二つ、あるいは、それ以上あらわれる場合には、最初の「は」は主題を表すが、あとの「は」は対比される事がら、事物を表す「は」である」p.5とのべ、以下の例を示しています。

○　私はたばこは吸いません。
○　私は酒は飲みますが、タバコは吸いません。

でも、「高校に入ってからは時間はあまりなく」で、「時間」が対比される事がらは想定

できません。だから、「時間は」の「は」は、適切でないのです。

では、なぜ「が」なのでしょう。

久野（1973）は、p. 27 で「「ハ」には二つ、「ガ」には三つの異なった用法がある」として、分類と例をあげています。

（6） a．主題を表わす「ハ」：
太郎ハ学生デス。
b．対照を表わす「ハ」：
雨ハ降ッテイマスガ，雪ハ降ッテイマセン。
（7） a．総記を表わす「ガ」：
太郎ガ学生デス。
（「（今話題になっている人物の中では）太郎だけが学生です」の意味）
b．中立叙述を表わす「ガ」：
雨ガ降ッテイマス。
オヤ，太郎ガ来マシタ。
（観察できる動作・一時的状態を表わす）
c．目的格を表わす「ガ」：
僕ハ花子ガ好キダ。

この分類で言うなら、「時間」は、「中立叙述を表わす「ガ」」をとるべきなのです。ありのままの事態を描写するとき、動作主体は「が」をとります。例えば、「（水晶玉をのぞきながら）見えます。広い草原に、小さな家がたっています。」、「（目の前の机を見ながら）机の上に本があります」。

A: 銀行はどこですか？
B: あそこに高いビルがありますね。銀行は、あのビルの隣です。

「時間がない」のは、客観的な描写なので、「は」は不適切なのです。

最後に残る疑問が、作者はなぜ「は」を選んだかです。

国立国語研究所（1964）の「3　助詞・助動詞の用法」、「3.2　助詞・助動詞における類義表現の分析」の「（1）主格の表現……「が」「の」」「は」」p. 122 には、動詞、形容詞、形容動詞、名詞、雑[iii]を述語とする文の肯定の数と否定の数が示された表[iv]があります。この表から「が」と「は」の（　　）の中の数値を抜き出すと、主格が「が」で示される動詞文では、肯定が 1018 例、否定が 81 例、「は」で示される動詞文は肯定 829 例、否定 123 例、主格が「が」で示される形容詞文では肯定 105 例、否定 44 例、「は」だと肯定 65 例、否定

	が		の		は	
	肯	否	肯	否	肯	否
動詞	1011 (1118)	74 (81)	111 (111)	11 (11)	730 (829)	106 (123)
形容詞	91 (106)	41 (44)	39 (40)	15 (15)	55 (65)	58 (66)
形容動詞	55 (58)	1 (1)	6 (6)	-	67 (73)	5 (6)
名詞	110 (113)	4 (6)	-	-	386 (412)	23 (24)
雑	3 (4)	-	-	-	16 (16)	-
計	1270 (1399)	120 (132)	156 (157)	26 (26)	1254 (1395)	192 (219)

表　述語を肯定と否定に分けて調べる（国立国語研究所、1964）

66 例、形容動詞文では、「が」肯定 58 例、否定 1 例、「は」肯定 73 例、否定 6 例、名詞文では、「が」肯定 113 例、否定 6 例、「は」肯定 412 例、否定 24 例です。

国立国語研究所（1964）は、χ^2検定（カイ 2 乗検定）という統計的処理をして、「**肯定否定の別は、名詞文では「は」「が」の選択にあまり関係しないが、動詞文ではこれと関係があり、肯定－「が」、否定－「は」という傾向にある**」という結論を導き出しています。統計的に、否定の動詞の動作主は「は」をとりやすいようです。それで、この作文の作者は、「時間はあまりなく」としたのかもしれません[v]。

そう思って見ると、この作者は、5-6 行目「今はあまり見られません」、8 行目「言葉では表せません」のように、動作主にかぎらず、否定の動詞の場合に「は」を使っています。

そして、大切なのが、日本語の「－は、－が－。」という文型は、オールマイティーで、とても安定しているということです。「－は」で何かしら言いはじめたら、あとは、「－が－。」とつづければ何とかなると言えなくもありません。たとえば、「熊本は、阿蘇がきれいです／夏が暑いです／自動車が多いです／おいしい果物がたくさんあります」。

学習者自身が書いた文で、「は」の使い方を考えさせたら、日本語力がぐっとアップすることでしょう。

「は」がならぶと、二つ目は対比を表すのだけれども、「**は－6**」の「時間」には対比するものが想定しづらいという消極的な理由、そして、「時間がない」というのは事態、状況の客観的な描写だ、また、「－は、－が－。」という文型は安定しているという積極的な理由、この学習者なら、理解できるだろうと思います。

6. 11 行目「忙しくなったのです」、15 行目「惚れられたのです」、17 行目「理解できたのです」

書きことばでは「のです」、話ことばでは「いそがしくなったんです」で、丁寧でない形

は「いそがしくなったのだ／んだ」です。このように「のだ」がついた文を、よく「ノダ文」とよんでいます。

「のだ」の用法には、いくつかあるのですが、この作者は、何かしら事実を述べ、その結果、あるいは、その理由をつげるときに、つかっています。

学習者によっては、「いそがしくなりました」のようなデス・マスの形だけでとおすか、「ーんです」だけですべてを言ってしまうか、どちらかという人がいます。二つの形があるのは面倒だし、第一、使い分けがわからないからです。使い分けは、「は」と同じように、日本語教育の課題です。

11 行目を「忙しくなりました」としても、多分、全く問題がないでしょう。でも、15、17 行目を「惚れられました」、「理解できました」とすると、感動や驚きの行きどころがなくなってしまいます。

それだけではなく、「先輩、あしたのクリスマスパーティーに来るんですか？」、「このコーヒー、飲むんですか？」と聞いたら、とても失礼です。感情的な誤解は、感動や驚きの行きどころより、さらに大きな問題です。

「のだ」を使いこなしているということは、作者の日本語力が高いことを示していますし、日本語教師としては、作者がどのような教育を受けたのか、そして、どのように理解しているのか、興味があります。

7. 3-4 行目「子どもの頃に」

鈴木（1978）は、格助詞「に」をとるかとらないかで、名詞を四つに分類しています。「きょう、あした、きのう、けさ、今、さっき、今週、来月、ことし、毎年、いつも」など、普通「に」をとらないもの、「10 時に、6 時 15 分に、3 日に、2 月に、1976 年に、日曜日に、休日に、休みに、江戸時代に」など、普通「に」をとるもの[vi]、「正月（に）、暮れ（に）、春（に）、昼（に）、午後（に）、夜（に）、～ごろ（に）、～とき（に）、うち～（に）、まえ（に）」など「両方の形をとるもの」、そして、「午前中（に）、3 年間（に）、～あいだ（に）」など、「「に」をとるかとらないかによって意味のかわるもの」[vii]です。そして、鈴木（1972）p. 108 は、「「午前中」「――の　あいだ」のような、一定の期間をあらわす名詞は、はだか格[viii]では、その期間全体をあらわし、に格ではその期間のうちのある特定の時間をあらわす」として、以下の例をあげています。

午前中　ずっと　おまちして　いました。
午前中に　お客さんが　みえました。

確かに、「に」のない「午前中」は、「午前」の「期間全体」をあらわしていますし、「午

前中に」は「ある特定の時間」をあらわしています。

鈴木（1978）で「－ごろ」が「両方の形をとるもの」に分類されていますが、表題にある「ころ[ix]」は、分類にありません。

a. 子どもの頃**に**ブラジルの子どもに対するテレビ番組でアニメを見始めました。
b. 子どもの頃ブラジルの子どもに対するテレビ番組でアニメを見始めました。

どちらでもいいでしょうか。どちらでもいいなら、「ころ」は、「両方の形をとるもの」ですし、b が不自然であるなら、「「に」をとるかとらないかによって意味のかわるもの」だろうと思います。「見始める」のは、「ある特定の時間」なので、「に」があるべきなのです。これが、「見ていた」だったら「子どもの頃」の方がいいことになります。この学習者は、意識的に使い分けているのかもしれません。

「とき」は、「両方の形をとるもの」に分類されています。多分、「に」があってもなくても、意味は変わらないでしょう。でも、3 行目と 8 行目の「とき」は、幅のある「期間」に、18-19 行目の「とき**に**」は、「選ぶ」瞬間に対応しています。こちらも意識的だった可能性があります。

8. 9 行目「楽しかったです」

「これは、本だ」、「この部屋は、しずかだ」ではぶっきらぼうなので、「本です」、「静かです」と言います。だから、「楽しかった」ではなく、「楽しいです」としているのだと思います。それに、ほかが「です／ます」を使っているのに、一文だけ言い切りでは、朱を入れられるかもしれません[x]。

でも、「本」のような名詞と「静か」のような形容動詞は、「です」と結びつくが、「楽しい」のような形容詞は「です」をつけてはいけない、という考え方があります。「本」や「静か」では、文を終われないが、「楽しい」はそれだけで文を終わる働きをするので、そこに「です」をつけるのはおかしい、また、「だ」の丁寧な形が「です」なのだが、そもそも「楽しい」に「だ」はつかない、という考え方です。私も、「うれしいです」と言われると、いくぶん、舌ったらずに感じます。では、どうするかと言うと、ここだけ「楽しかった」とするか、「子どもの時はポルトガル語で、本当に楽しく見ていました」のように、動詞で終わらせるか。

で、一般的に、日本語教育ではどうかと言うと、「形容詞＋です」をみとめています。スリーエー（2013）は、「大きいです、大きくないです、大きかったです、大きくなかったです」で、文化（2000）は、「大きいです、大きくありません、大きかったです、大きくありませんでした」で導入しています[xi]。

だから、ここで添削する必要はないでしょう。学習者を見て、必要だと思ったら、形容詞に「です」はつかないという考え方があることも教えてあげます。

9. 訂正すべき箇所

訂正するというのは、学習者に変化を求めることで、相手に変化を求める側はそれなりの責任を負わねばなりません。責任を負いきれないなら、「自分には能力がないんだ」と観念し、訂正を見送るしかありません。

以下、これははっきり間違っている、そして、私の能力と学習者の能力を考えたとき、指導が可能だ、しかも、指導したら必ず伸びる、と判断した誤用とそれに対する分析です。

○ 16 行目「数月」⇒「数か月」

ポルトガル語をふくめた欧米の言語は、名詞に単複の別があります。日本語にも、「人々、山々」や「数個、数人、数冊」などの言い方があります。時間で言うなら、「数時間、数日（間）、数週間、数年（間）」。ただ、「月」だけは、「数月」とは言わず、「数か月（間）」です。作者は、日本語の法則にのっとって、書いていたのです。

さらに、これは、ポルトガル語の「uns meses」[xii]（uns は不定冠詞 um の、meses は mês「月」の複数形）の直訳でもあります。日本語の言語体系の影響と母語の影響、両方を受けた結果だと思います。

○ 18-19 行目「申し込んだときに」⇒「申し込むときに」

「申し込んだ」のも「選んだ」のも、過去の出来事なのですが、「大学に申し込んだときに、考えなくても日本語科を選びました」だと、申し込んでから選んだことになってしまいます。実際には、選んでから、申し込んだはずです。

アメリカへ行くときに、スーツケースを買った。
アメリカへ行ったときに、スーツケースを買った。

「行く」の文では、日本で買ったことになりますが、「行った」だとアメリカで買ったことになります。助動詞の「た」は過去をしめしますが、それは主節でのことで、「ーとき」のような従属節では、過去ではなく、主節の時制より以前であることをしめすのです。

ポルトガル語では、「申し込む」も「選ぶ」も過去時制をとり、前後関係は文脈で類推するのだと思います。日本語では、従属節でか主節でかによって「た」のはたらきがかわるので、使い分けなくてはならないのです。

これも、日本語とポルトガル語の両言語体系の影響を受けた誤用でしょう。

○ 22 行目「新しい語彙も」⇒「新しい語彙を」

山田（2016）で「も」を引くと、「類似した事柄を列挙したり、同様の事柄がまだあることを言外に表したりする」とあり、「あなたが行けば、私も行く／菊もかおる季節」などの例があげられています。前者は「列挙」で、後者は「言外」なのだと思います。ところが、「新しい語彙」に列挙はないし、言外の何かを想像することもできません。もしかしたら、ポルトガル語の世界では、想像できるのかもしれません。言語使用をささえている文化的な背景を考察しなくてはなりません。

11 行目にも「も」があり、適切なのですが、それは、「大学受験」のほかに、高校生活のいろいろが想像できるからです。

○ 22-23 行目「文法を身に付いたり」⇒「身に付けたり」

これは、日本語学習者がよく間違える、動詞の自他による誤り例です。日本語は、意味と形の似た自動詞と他動詞のペアが数多くあることが一つの特徴です。「水が流れる／水を流す、窓が開く／窓を開ける」、そして、「文法が身につく／文法を身につける」などです。「水が流れる」と「水を流す」の違いは、水そのものが自力、あるいは、自然に流れるか、だれか、あるいは、何かが力、作用をおよぼして流すかなのですが、意味の違いというより、ニュアンスの違いで、とらえどころがありません。その上、語形が似ているので、学習者にとっては、面倒です。

ここでは、「発音を－、語彙を（も）－」ときているので、「文法を身に付けたり」とするのが妥当でしょう。

10. 訂正するかしないかなやむところ

間違いと言えばそうだけれど、「きのう学校へ行きますた」のような明確な間違いではない、それまでの教育内容とか、学習者の能力、性格だとかによって訂正するかどうかを判断した方がいい例、以下は、そういったものです。語学的な指導だけでなく、教育的な配慮が必要です。

○ 4 行目「子どもに対するテレビ番組」⇒「子ども向けの番組」

文法的に誤りではないし、意味も通じます。でも、一般的に「子どもに対するテレビ番組」とは言わず、「子ども向けの番組」と言うでしょう。「子ども番組」という言い方もありますが、そうすると、「子ども番組のテレビ番組」となってしまい、この場合の添削には適しません。

「子どもに対するテレビ番組」は、ポルトガル語「programas de TV para crianças」の直訳だろうと思います。「para」は、「－のための、－用の、－に対する、－にとっての、

ーにむかった」など多くの意味をもった前置詞で、作者は、「para」の訳として、「ーに対する」を選んだのでしょう。「para」と「対する」の意味、用法を対照言語学的に分析するのはたいへん興味深いですが、ここでは、このままにしておくか、「子供向けの番組」という言い方があることを紹介するかのどちらかだと思います。

○ 6行目「趣味に限らず、」⇒「趣味というだけではなく、」

「Xに限る」というのは、「ビールに限らず、アルコールは何でも好きです」、「アニメに限らず、日本のことは何でも知りたい」などのように、「Yの中の部分のXに限る」という意味ですが、「アニメは趣味に限らず、私の人生の一番大事な影響です」での「趣味」は「私の人生の一番大事な影響」の一部ではなく、「趣味＝私の人生の一番大事な影響」です。

ここでは、「Xだけではなく、Y」が適当ですが、「アニメは趣味だけではなく、私の人生の一番大事な影響です」では落ち着きません。「趣味**という**だけではなく」としたいところです。

「～だけではなく」は、「権利だけではなく、義務もある」（ガ格）、「自分の権利だけではなく、相手の権利も認める」（ヲ格）ではOKなのですが、「アニメは、趣味だけではありません」のように述部に来ると「**という**」を要求するようです。

○ 6-7行目「私の人生の一番大事な影響です」⇒「私の人生で一番大事なものです」

「私の人生の一番大事な影響です」という文を見たとき、「私の人生にアニメが一番大きな影響を与えた」と言いたいのだろうと思いました。でも、「影響」は、ポルトガル語で「influência」で、この語には「影響」だけでなく、「熱中」という意味があります。「彼は絵にinfluênciaがある」と言うと、「絵に熱中している」という意味になります。作者は、「私の人生で一番熱中している」と言いたかったのかもしれません。

何もせずにほうっておいてもいいでしょうし、あたりさわりのない「私の人生で一番大事なものです」という言い方を示してもいいでしょう。できることなら、作者本人に何が言いたかったのかを確認し、どのような日本語がいいか一緒に考えたいです。

○ 12行目「友達に紹介していただいた」

「いただく」は目上の人にたいして使う言葉で、「友達」にたいして使うと落ち着きません。可能性は二つ、日本語の問題か、ポルトガル語の問題か。

日本語の問題というのは、まさに、「いただく」は目上の人にたいして使う言葉で、「友達」は目上ではない、ということ。この場合は、「紹介してもらった」にかえなくてはなりません。もう一つは、ポルトガル語の「amigo（友達）」は年齢に関係がないということ。もしかすると、この「友達」はかなり年上かもしれません。もしそうなら、日本語の「友

達」を適当な語にかえなければなりません。

○ 13行目「そのアニメが終わった」⇒「そのアニメを見おわった」

「ある日、友達に紹介していただいたアニメを日本語で見」たことから、「終わった」のは番組のすべてではなく、アニメ放映の1話でしょう。「アニメが終わる」だけだと、シリーズの放送が終わったような印象も受けます。「そのアニメを見おわった」なら、誤解がありません。

文脈から意味はとれるし、文法的な誤りもないので、添削の必要はないかもしれません。学習者の能力、意欲が高ければ指導してもいいし、性格によっては、何も言わないという選択もあります。

なお、「見おわった」に訂正するなら、「が」を「を」にかえること、そして、補助動詞だから「おわった」と平仮名の方がいいだろうこともつけくわえます。

○ 13-14行目「終わったとたんに」⇒「終わるとすぐに」

グループ（1998）で「とたん」を見ると、以下の記述があります。

1 V-たとたん（に）

（1）ドアを開けたとたん、猫が飛び込んできた。

（2）有名になったとたんに、彼は横柄な態度をとるようになった。

（3）試験終了のベルが鳴ったとたんに教室が騒がしくなった。

（4）注射をしたとたん、患者のけいれんはおさまった。

動詞のタ形を受け、前の動作や変化が起こるとすぐ後に、別の動作や変化が起こるということを表す。後の動作・変化を話し手がその場で新たに気付いたような場合に用いられるため、「意外だ」というニュアンスを伴うことが多い。したがって、話し手の意志的な動作を表す表現が後にくる場合は用いることができず、代わりに「とすぐに／やいなや」などが用いられる。

（誤）　私は家に帰ったとたん、お風呂に入った。

（正）　私は家に帰るとすぐにお風呂に入った。

「コースを探す」のは、まさに「意志的」なので、落ち着かないのでしょう。「そのアニメが終わるとすぐに日本語のコースを探して、通い始めました」なら、落ち着きます。ただ、筆者は、「とたんに」で喫緊な感じを出したかったのかもしれません。

意味が通じるし、「そのアニメが終わったとたんに日本語のコースを探した」と言わなく

もないと考えれば、添削する必要はありません。典型的な日本語を教授する必要があるなら、いくつか例文を与え、「とたんに」の主文に意志的な動作を表す表現は来ないことを説明した方がいいでしょう。

なお、グループ（1998）では、「とたん」と「とたんに」とを同義だとしていますが、検証が必要です。この「に」については、3-4 行目「子どもの頃に」をご覧ください。

11. 訂正する必要のないもの

○ 13 行目「見ました」、16 行目「見た」

「みる」を辞書で引くと、「見る、覧る、観る、看る、視る」などの表記があります。テレビ番組の場合は、「観る」が適当だという考え方があります。でも、「見る」で間違いではないでしょう。

「観る」という表記があることを紹介し、「見る」との使い分けを考えさせると、学習者にとって面白いのではないでしょうか。

○ 15 行目「惚れられた」

文字通りに解釈すると、「日本語が作者に惚れた」ということになります。文学的で、面白い表現です。ただ、典型的な日本語ではありません。「日本語がどうしたんですか？」、「誰に惚れたんですか？」など、質問して、文意を確かめた方がいいでしょう。言いたいことと書かれた日本語とが一致していないかもしれないからです。

一致していないなら、どのような日本語がいいか、一緒に考えるし、「惚れられた」が言いたいことそのままなら、絶賛してあげましょう。

○ 19 行目「考えなくても」

これは、ポルトガル語の「sem pensar」[xiii]を訳したのだと思います。ただ、「pensar」には、「考える」以外に、「心配する」といった意味があるのですが、「考える」にはそれがありません。ここは、「迷わず、なやむことなく」などとすべきでしょう。

○ 23 行目「日本語科で」

「日本語科で」は、「合わせることができる」にかかっていき、そうすると、「分野です」があまってしまいます。「日本語科は」なら「分野です」にかかり、文の構造を考えると、こちらの方が自然です。

どうして「で」を選んだのか、作者にじっくり聞いてみたいものです[xiv]。

○ 24 行目「趣味を合わせる」

作者は、「合わせる」を「なじませる」とか、「調和させる」のような意味で使っているのだ考えると、ポルトガル語の動詞「acomodar（なだめる、調停する、ならす）」が思い出されます。

このままでいいかもしれないし、作者の意図を確認し、「将来の仕事に私の大好きな趣味を役立てることができる」の方が日本語らしいと言ってもいいでしょう。

○ 25 行目「分野」⇒「学科」

「日本語科」が「分野」かどうかという問題です。力のある学習者なので、「学科」を繰り返すのをさけた、あるいは、ポルトガル語の「departamento（学科）」は、「campo（分野）」に置き換えられる、あるいは、その両方か。日本語教師は、これらの可能性を学習者本人に確認し、訂正するか考えます。

○ 25-26 行目「趣味になってよかったです」⇒「趣味でよかったです」

確かに、趣味でない状態から趣味である状態に変化したのですが、私の感覚では、その変化ではなく、現在の状態に焦点をあてた「趣味でよかった」の方がしっくりきます。これでいいのかと聞いたら、「ああ、そうだ。「趣味で」だ」とこたえるかもしれません。

12. 日本語作文を添削するときは…。

とにかく、「あなたの日本語で判断するな」です。

ことばは言霊（ことだま）、その人そのものです。でも、学習者は、あなたになろうとしているわけじゃない。世間一般的な「日本語」を身につけようとしているのです。だから、添削するときも、「私は、こう言わない」ではなく、世間一般の日本人がどう言うかを想像し、思い出してください。あなた個人の日本語なんてどうでもいい、自分自身を形成している日本語をどれだけ客観的にみられるか、ためされます。作文の添削では、あらゆる角度から考察し、本当に誤用なのか見極めなくてはなりません。

日本語なんて、特別じゃない。「日本語は、むずかしい」と言われることがありますが、それは、漢字仮名交じりという表記体系であって、言語自体に難易などありません。人間の脳は、人種、民族をこえて、すべて等しい能力をもっています。日本語の研究者の中にも「日本語は、特別な言語だ」という人がいますが、いかさまです。「母語」というのは、その言語を話す人にとって、もちろん特別ですが、研究対象の言語として日本語が特別なはずがありません。

日本語を母語とする人は、感覚で○×をつけることができます。でも、それだけでは、学習者に何も伝わりません。なぜ誤用なのか、そして、なぜそのように訂正するのか、学

習者に理解させられるか、理解させられないなら、間違ったままにしておいた方がいい。×をつけるなら、その責任をとらなくちゃ。それに、今、訂正しなくても、いつか学習の機会は来るでしょう。

「感覚で〇×をつける」と言いましたが、そもそも〇と×の二択とはかぎりません。「数月」のように、存在しない語や「あまりなく。」の句点などは、はっきり×ですが、作者の意図次第で、誤用とも正用ともとれる場合があります。書き手の意図をじっくり聞く必要があります。

そして、何より大切なのは、学習者の日々の努力に敬意をはらい、教師が鋭意、努力することです。

謝辞：作文を提供してくださった、ブラジル、リオ・デ・ジャネイロ連邦大学文学部の学生さん、そして、協力してくださった、同大学のチアゴ・アブレウ先生に心から感謝いたします。ありがとうございました。

参考文献

1. 池上岑夫、他（1996）『現代ポルトガル語辞典』白水社
2. 門脇薫、西馬薫（2014）『みんなの日本語　初級　第２版　やさしい作文』スリーエーネ ットワーク
3. 久野暲（1973）『日本文法研究』大修館書店
4. グループ・ジャマシイ（1998）『日本語文型辞典』くろしお出版
5. 国立国語研究所（1964）『現代雑誌九十種の用語用字〈第３分冊〉分析』、国立国語研究所報告
6. Jaime Nuno Cepeda Coelho（1998）*Dicionário de Japonês – Português*, Porto Editora
7. ジョアン・ロドリゲス（1604）『Arte da Lingoa de Iapam』イエズス会
8. ジョアン・ロドリゲス著、土井忠生訳（1955）『日本大文典』三省堂
9. 鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』むぎ書房
10. 鈴木忍（1978）『教師用日本語教育ハンドブック③　文法Ⅰ』凡人社
11. スリーエーネットワーク（2013）『みんなの日本語　初級Ⅰ　第２版　本冊』、『みんなの日本語　初級Ⅱ　第２版　本冊』スリーエーネットワーク
12. 野田尚史（1996）『「は」と「が」』くろしお出版
13. 文化外国語専門学校日本語課程（2000）『新文化初級日本語Ⅰ』文化外国語専門学校
14. 山田忠雄、他（2016）『新明解国語辞典　第七版』三省堂

---

[i] 「N3」というのは、日本語能力試験によるレベルで、「日常的な場面で使われる日本語をある程度理解することができる」力です。この学習者には、もっと力がありそうです。

[ii] 「o」は、男性定冠詞、「a」は女性定冠詞です。

[iii] 国立国語研究所（1964）p. 120「雑というのは「**どう**だい」「……**について**である」「…**してから**である」など、臨時に体言的に使われたものである」。

[iv] 国立国語研究所（1964）p. 120「雑というのは「**どう**だい」「……**について**である」「…**してから**である」など、臨時に体言的に使われたものである」。

「動詞については、「書く」「書いた」「書くだろう」などのほかに、これらに「のだ」「にちがいない」などのついた形（「書くのだ」「書くようだ」「書くはずだ」「書くにちがいない」「書いてよい」など）もこれに準ずるものと考える。名詞や形容詞などにしても同様である」、「（　　）の外の数字はそれらの準動詞などを加えないもの、（　　）の内のはこれを合計したものである」。

[v] 作者が国立国語研究所（1964）を読んだとは思いませんが、「雨がふる／雨はふらない」のように、動詞の否定文では、直感的に、「は」がでやすい感じがありますし、そう習ったのかもしれません。

[vi] 鈴木（1972）p. 108 は、「に」をとらない名詞は、「話し手のおかれたときを基準にしてさししめす」と指摘しています。一方、「に」をとる名詞に、「話し手のおかれたとき」は関与しません。

[vii] 「あいだ（に）」でしたら、「夏休みのあいだ、自動車学校に通っていました／夏休みのあいだに、運転免許をとりました」、「9 時まで、寝ていました／9 時までに、寝ました」のような対立があります。「あいだ」、「まで」の主文の動作には時間的な幅がありますが、「に」のある文の動作は点的で、幅がありません。ことに「まで」の例文では、「に」があるとないとで、寝ているときが反対になってしまいます。

[viii] 「はだか格」とは、文の構成要素となっている名詞が、格助詞をとらない場合のことです。

[ix] 「5 時ごろ」と「子どものころ」とは、意味も近いし、漢字も同じ「頃」ですが、これらは別の言語要素です。前者は「ころ」と言わないし、後者は「ごろ」となりません。第一「ごろ」は語の一部となる接辞であって、語、名詞ではないし、「ころ」は独立した語、名詞です。

[x] 私だったら、「楽しかった」でも、なおしません。この文脈では、許されると思います。17 行目の「驚いた」と同じように。

[xi] 中学校の英語の教科書で「大きいでした、大きくないでした」という日本語を見たことがあります。これは、日本語を英語の「was／were big、was／were not big」に合わせているのだと思います。英語教育では英語が中心ですが、「大きいでした、大きくないでした」がいいとは思えません。

[xii] 英語にすると「some months」です。

[xiii] 英語に置き換えると「without think」です。

[xiv] 「来月の日程は、執行部で考えています」のような、組織が動作主になる場合の「で」なのかもしれません。